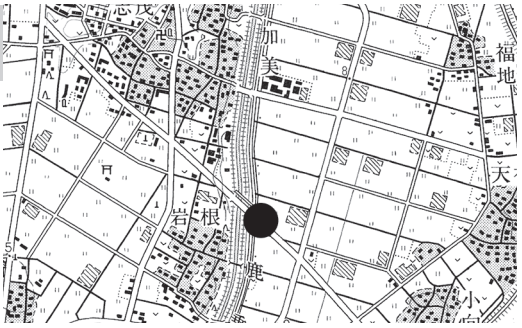
五反田（ごたんだ）遺跡



調査地点（1/2.5万「西尾」）

所　在　地　安城市小川町五反田・岩根下
（北緯34度54分13秒 東経137度5分43秒）

調査理由　床上浸水対策特別緊急事業（鹿乗川）

調査期間　平成22年7月～平成22年10月

調査面積　2,260㎡

担　当　者　池本正明・石井香代子・阿部敬

調査の経過　愛知県西三河建設事務所より愛知県教育委員会を通じて、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。

立地と環境　遺跡は矢作川の支流である鹿乗川左岸の沖積低地、標高約6mに立地する。このあたりの低地の開発は弥生時代には既に盛んに行われていたことが分かっており、古代では水田跡が発見されている。現在でも鹿乗川に並走する明治用水から取水する田が広がっており、北には下懸遺跡、南には惣作遺跡、明治用水路と鹿乗川を隔てた西には加美遺跡など、付近には多数の遺跡が存在する。弥生時代から古墳時代にかけてのそれらの遺跡は鹿乗川流域遺跡群と呼ばれている。

調査の概要　鹿乗川と明治用水路を東西に跨ぐ小川橋を挟んでその南北を調査範囲とし、北部をA区、南部をB区とした。A区では近世以降の溝、中世前期の陶器と溝、弥生時代の土器とガラス玉、方形周溝墓およびそれに関連する溝が検出された。B区では近世以降の溝、弥生時代の土器と管玉が検出された。

弥生時代終末期～古墳時代初頭　遺構としては、A区で方形周溝墓１基とそれに関連する可能性のある溝が検出された。方形周溝墓は調査範囲内で全容を把握することが出来なかったためその認定には限界があるものの、周溝内から手焙形土器２点、付近の溝からはガラス玉３点が発見されるなど、墓域の存在を予想させる遺物が多く認められた。ほかの溝については確定的な証拠は乏しいが、方形周溝墓の一角を構成する可能性がある。遺物としては、上記のほかに高杯と壺が検出された。その帰属時期は、互いに僅かな違いはあるが、弥生時代終末期のものと見て差し支えない。B区では当該時期の遺構は認められなかったが、遺物としては土器片と管玉が発見された。

中世前期（13世紀）　A区で中世前期の無釉の陶器碗が検出された。完形に近いものが１点と破片が数点である。完形に近い方は13世紀のものと推定される。遺構としては、幅約30cmの狭い溝が縦横に走っていた。垂直的には弥生時代のそれと同一平面において検出されたが、それを切っていたので明らかに後代のものと考えられる。帰属時期は上記の陶器からの類推である。B区では目立った遺構はないが、無釉の陶器片がわずかに回収された。

近世以降　A･B区ともに溝が検出された。A区では東西方向と南北方向に走る幅１mほどの溝が十字に交差した状態で検出された。B区では幅30cm程度の規格の揃った溝が西北−東南方向に約1m間隔で並列されていた。田畑に伴うものと推定される。遺物としてはB区で漆塗りの木碗が１点検出された。より具体的な時期は検討中である。

総　括　北にある下懸遺跡と南にある惣作遺跡の両方で習書木簡が検出されていたので、五反田遺跡でももしかしたら同じような遺物が出るかもしれないと期待されていたが、残念ながらそれに応えることはできなかった。しかし鹿乗川流域遺跡群において弥生時代終末期から古墳時代に帰属する方形周溝墓が検出された事例は少なく、また愛知県内において類例

の少ない手焙形土器を伴っていたことは特筆に値するだろう。ガラス玉は今後行う予定の自然科学分析によって往時の社会的ネットワークの解明に資するところがあると思われる。　（阿部　敬）

弥生時代および中世遺構の検出状況（A区）

中・近世遺構の検出状況（B区）

周溝出土の手焙形土器1

周溝出土の手焙形土器2

壺形土器

石製勾玉とガラス小玉